日蓮大聖人御書全集

乙御前母御書

おとごぜんのははごしょ

新版
1684
〜
1685

乙御前母御書（おとごぜんのははごしょ）

文永10年（'73）11月3日　52歳　日妙

乙御前母　おとごぜんのはは　日蓮

なによりも、女房（にょうぼう）のみとしてこれまで来（きた）って候（そうら）いしこと、これまでながされ（流）候（そうら）いけることはさることにて、御心（おんこころ）ざしのあらわるべきにやありけんと、ありがたく（有難）のみおぼ（覚）え候（そうろう）。

釈迦如来の御弟子あまたおわししなかに（中）、十大弟子（じゅうだいでし）とて

十人ましましがなかに、目犍尊者と申せし人は神通第一にておわしき。四天下と申して日月のめぐり給うところを、かみすじ一すじきらざるにめぐり給いき。これはいかなるゆえぞとたずぬれば、せんじょうに千里ありしところをかよいて仏法を聴聞せしゆえなり。

また天台大師の御弟子に章安と申せし人は、万里をわけて法華経をきかせ給いき。伝教大師は三千里をすぎて止観をならい、玄奘三蔵は二十万里をゆきて般若経を得給えり。

道のとおきに心ざしのあらわるるにや。

かれは皆、男子なり。権化の人のしわざなり。今、御身は女人なり。ごんじちはしりがたし。いかなる宿善にてやおわすらん。昔女人、すいおとをしのびてこそ、あるいは千里をもたずね、石となり、木となり、鳥となり、蛇となれることもあり。

十一月三日　　日蓮　花押

おとごぜんのはは

おとごぜんが、いかにひととなりて候らん。法華経に

宮仕奉公

みやづかわせ給うほうこうをば、おとごぜんの御いのち、

幸

さいわいになり候わん。

乙御前命

いまは法華経をしのばせ給いて仏にならせ給うべき

偲　成

女人なり。かえすがえす、ふみものぐさき者なれども、た

懶

びたび申し候。また御房たちをもふびんにあたらせ給う

不便当

承

とうけたまわる。申すばかりなし。